

第四回 草原の術師

一

むかしのはなしである。

ここは今で言うなら中国の北西部。一面に広がる草原。騎馬の民を育んだ、果ての知れない草の野を、一人の少年が歩いてきた。

やわらかな青を基調とした、そのいでたちは、薄緑の絨毯じゅうたんの上で目につきにくい。この姿になることを教えた人物は、おそらく相当旅慣れているのだろう。

少年の目は、手元の印をずっと追っている。

小さな円盤状の印。これが指し示す方向へ向け、少年は一步、また一步と歩いて行く。

草原とは、緑の砂漠である。

草はあっても食べられない。大地の上に水はない。今の季節に雨はない。少なくとも少年にとって、これでは砂漠と大差なかった。

事実、この数日と言うもの、彼が口にしたのは、水の少ない草だけである。食べた、わけではない。水欲しさについ口にした、というのが正しい。もっともその結果、ますます咽のどが乾いてしまったのだが。

少年の歩みが止まった。本人は、まだ歩いているつもりでいる。足が上がらない。前へ進めない。しかし本人はそれに気付かない。ただただ、印の示す先へ向けて、動こうとして…そのまま倒れてしまった。

少年は、まだそれに気付いていなかった。

二

「ちよつと休んで行くか、風くん」

深い森をようやく抜けた道はずれ。男と少年が並

んで歩いてきた。

男の方は、四十前くらいか。五尺そこそこ小柄な割にはがっしりとした体格。少し皺のある落ち着いた表情。ちらほらと白いものが混じる髪を、軽く束ねて後ろへ流している。灰色がかつた綿の着物に黒っぽい麻のはおり。足は長旅用のこしらえ。左手には、頭がずんぐりとした木の杖を持っている。と言つても、べつに杖を撞かねば歩けないという風ではない。

もう一人は、まだ十かそこらの少年。煤けてはいるが、もとは白かったとわかる旅衣を着て、なにやら球状ものが入っているような木綿の袋をぶる下げながら歩いている。

「雷くんの居場所を見てくれんか？」

風と呼ばれた少年は、男の声に目だけで応えた。腰に吊した木綿の袋から、半ば透きとおった玉を取り出し、手の平で温めるかのように持つ。しばらくすると、玉の中にぼつと点が浮かび出してくる。

「ええと…ぼくたちの場所が緑宝寺から東に…およそ五百里。雷のいるところまでは…うんと…北に行つた東の方。だいたい八百里…かな」

男は軽くうなずく。

「むむ。で、そつちの方に流れている『風』はあるかい？」

少年は今度は空を見上げて、目をつむつた。しばらく首を縦横に振り、時おり眉間にしわを寄せたりしていたが、やがて目を開けると、

「だめ。みんな逆方向だよ」と、あきらめ顔で答える。

「うむむ…しかたないな。高いところの『風』に乗れば何とかなるかも知れんが、きみにはまだ荷が重いし。もう少し歩かねばならんかな—ん、どうしたね？」

少年は、戸惑つたような瞳で男の顔を見ながら、玉を指さしていた。男は近付くと玉をのぞき込む。

「む。彼の『光』が、薄れていくな……」

眉一つ動かさない、普段通りの平然とした顔。だ

3 第四回 草原の術師

がここ数ヶ月、一緒に旅していた少年の耳には、その顔の奥で歯噛みする音が響いたように思えた。少年の額に汗が浮かぶ…暑くもないのに。

「『光』が薄れるって…」

「雷くんの身に、何かあったかな…ま、飯にしよう」肩にかけた荷をおろそうとする男。わずかにその腕が震えている。少年の顔からは血の気が引いていった。素早く玉を袋に入れると、なにやら取り出そうとしている男の手を引っ掴んで

「乗るよ、いちばん上の風に…」

男がなにか言おうと口を開いたが、声が出る前に二人の姿はそこから消えてしまった。

三

乾した草の匂いをかいで、少年はやつと足が動いていないことに気づいた。

いつの間にやら布団の中。頭の上には天幕の屋根。

がば、と跳ね起きた目の前に、小柄な人影が立っている。

「ダメヨ、ネテナキヤ」

女性である。薄い緑の衣に緑の胡服、腰までありそうな髪を三ツ編みにして、肩から前へ垂らしている。浅く焼けた顔には、そばかすの痕が少しだけ。「少女」と呼ぶには気恥ずかしい年頃だが、ただ「女」と呼ぶのはちよつともつたいたい。ま「娘」というのが妥当なところだろうか。

もつとも、見ている少年にとっては、そんな違いなど関係ない。歳上の女性は、みんな「おねえちゃん」か「おばちゃん」で済んでしまつたのだから。まして今の彼には、そんなことよりも重要な問題があった。きよとん、と見つめる目を見ていた娘が、ぼんと手を打って

「ソツカ、コトバガチガウノネ…エエト…」

この言葉、わかる？」

ぶんぶん、音が聞こえそうなくらいに、少年が頭

を振る。そのしぐさが妙に可愛らしかったので、娘は思わず微笑ほほえんでしまった。つられて少年も笑顔になる。和やかな雰囲気があたりに流れた。

娘は、湧き出る笑みを無理に抑えて、

「だめよ、草原をあまく見ちゃ。私たちだって、一人じゃ何日も過こせないんだから」

「ごめんなさい」

しゅんとする少年の顔を見て、娘はちよつと気の毒になつた。

「べつに、謝らなくてもいいけど…どうして、こんなところ、一人で歩いてたの？」

「これが…」

少年は懐から印を取り出して、娘に見せる。その瞬間、娘の顔色が変わつた。

「コレ…ナンナノ、コノモンショウウ!？」

言葉が変わっていることさえ気付いていない。それほど、勢い込んでいた。

少年は勢いに押されて、ただ目を白黒とするばかり

り。しばらくして、息を整えた娘が、天幕の入り口から振り返つて言った。

「長おさに会つてくれない？」

その声は、あまりにも緊張していた。

四

天幕のおもてに出た。まわりには、大小さまざまな天幕が十四・五ほど建ち並び、その隙間に馬が放たれている。水を飲む馬、草を食はむ馬。砂漠も同じと思つていた草原が、急に生き生きとしたものに見える。

娘の発する緊張感さえなければ、少年はすぐにも馬たちの中に駆け込んで行つただろう。

「おうおう、珍しいことだな。こんなところまで漢人かんじんが来るとは」

真ん中の大きな天幕に入るや、中から大声が響い

5 第四回 草原の術師

た。椅子に座っていても天幕が小さく見える大男。

「『漢人』って、ぼくのこと？」

少年は、この大声にも平然としている。

「そつだ、もちろん。漢の言葉を使うのは漢人に決まっておろつが。」

…で、チャムリ。何か用か？」

娘が少年のとなりに進み出た。

「ええ……この子が、面白いものを持っていたものですから…」

長は眉をしかめた。幼おほなな児このころから見ているが、思わせ振りの口など聞いたことがない。なにかあつたか、と考かんえながら、目つきが鋭くなる。

「さあ、さつきの印を見せてあげて」

妙な雰囲気を感じながら、少年は右手に持った印を前に差し出した。

子供の手の平にちょうど収まる、小さな丸い印。その表面には一匹の竜。その四方に赤青黒白の四石。その間を埋めるように「縁」「宝」「寺」「印」の四字。

これを見たとなん、長の様子が変わった。

「お前、これをどこで？」

「老師から預かつたんです。これを持って、『北岩の術師』に会いに行け、って言われて」

長とチャムリが顔を見合わせた。

「『北岩』って、北の、岩のことよな」

期待に満ちた眼差しに、少年は戸惑つてしまった。

「そつだと思つけど…それが、どうかしたの？」

娘の顔が、ぱつと明るくなった。長はその顔に大きく頷くと、少年に向かつて言つた。

「この北に、大きな岩がある。その表面に彫られた模様が…その印とそっくりなんだ。」

その岩の中には、わしらの恩人がいてな。もう一度お会いしたいのだが…」

少年が長に飛びついた。娘が制止する間もない。

「そこまで連れて行って！ぼくは、どうしてもその人に会わなくちゃいけないんだ!!」

その強い調子に、長でさえも気圧げおされた。なぜか

はわからないが、この子はわしら以上に、あの方を必要としているようだ…

長は少年の両肩をつかむと、大きくうなずいた。そして娘に言う。

「じゃあ、チャムリ。誰かあと一人連れてきてくれ。そう——できればフサンがいいな。」

わしも行こう。馬も忘れずにな。人数分……と、お前の名は何と叫びたかな」

聞かれたのは少年である。

「雷遊子っていいです。雷で遊ぶ子。」

「はは、なかなか威勢のいい名前だな。わしはグン二という。」

それでは雷ヤン……言にくいな、雷と呼ばせてもらうぞ。雷、きみは馬には乗れるのか？」

雷は大きく横に首を振った。

「そうか。なら四頭だ、帰りはあの方にも乗っていただかねばならん」

嬉しさを押さえきれない様子のチャムリが、はい、

と一言残すと天幕から飛び出していった。

グン二はその後ろ姿を見送りながら、ふう、と息をもらす。姿が天幕から消えてもしばらくじつとそこを見ていたが、ふと気を取り直して振り返ると、雷遊子に向かつて声をかけた。

「雷、きみは仕度したくができるまで、飯でも食っていないさい」

言われて天幕を出た少年。なんでこうなったんだろつ、と考えながら、さきほどまで寝ていた天幕へと戻っていった。

五

再び、天幕に入った雷遊子。また少しめまいを感じてしばらく横になっていると、チャムリが何か手に持って入って来た。

「大丈夫？一日くらい休んでからでもいいのよ」

少年はがば、と跳ね起きた。元気だと見せ付ける

7 第四回 草原の術師

かのように身体をぐいぐいと動かして言う。

「ね、だいじょぶだよ。」

ぼくは、どうしても…どうしても会わなくちゃいけないんだ。会って、それから、老師を探しに行くんだー。」

まさに必死の表情。止めても無駄ね。そう感じて、娘はそれ以上言わなかった。ただ食事をもせた盆を、黙って少年の近くに置く。

しかし、彼は手をつけようとしない。

「どうしたの？…いくらなんでも、食べるひまくらいはあるんじゃない？」

そう言われても、少年はおっかなびっくり見守るだけで、さじにすら手を伸ばさない。しかたないわね、と、娘が一口食べさせようとすると、少年はすぐると後ずさりをはじめた。

「チャ、チャムリさん、これって…子供が飲んじゃいけないものでしょ!？」

泣きそうな顔で指差したのは、子供の手にはちよっ

と大きい、木彫りの椀わんの中。白濁はくだく色の液体。

そっか、とチャムリは納得し、思わずけらけらと笑いだした。

「ほ、ほんとに、草原のこと何も知らないのねえ。

これはお酒じゃなくなって山羊やまのミルクよ。ミルク——おっぱいのことよ。」

きよとん、とする雷遊子。

「じゃあ…飲めるの?」

「もちろんですよ。私たちは毎日飲んでるわ。子供も、ね」
言われて、おそろおそろ口をつける。こく、このどを通してから、また驚いたように顔を振り上げた。

「おいしい!」

「他にもあるわよ。遠慮なく食べてね」

しばらくは口も聞かず、ただ手と口を忙せわしく動かしていた雷遊子だが、なにかの拍子に、その動きがぴたつ、と止まった。のどにつかえたのか、と心配そうにチャムリが聞く。雷は首を振った。

「こんなおいしいもの…老師にも飲ませてあげたいな、って思ってた…」

「いい人なのね。あなたのお師匠さんって」

「うん！北岩の人も、老師みたいな人だといいんだけど…」

チャムリの顔に、すこし陰がさした。

「大丈夫。いい人よ、ほんとに」

六

天幕から馬に乗り、草の海を進む。

先頭にグンニ、そのすぐあとをチャムリが追う。筋肉質で無口なフサンは、雷遊子を抱えるように馬に乗り、右手一本で、乗り手のいない馬を器用に導いてゆく。

進むこと二刻あまり。草だらけのこの世界に、似つかわしくないものがゆらりと見えはじめる。

雷遊子が目をむいた。

「こんなに大きいんだ…」

それは大きな岩だった。草原の海に浮かぶ孤島。まわりの草原との違和感がありすぎる。「こつこつとした岩。まだ距離はあるはずなのに、圧倒的な威圧感に気圧される。」

「やめておくか？わしらとて、無理に連れて行くつもりはないが」

少年はぶるぶると首を振って、

「行く」

ひとこと言つたり馬から飛び降り、岩壁へと向かつて歩いて行く。手にはしっかりと盤印を握り締め、緊張に唇を青くして。

さっとフサンの馬がその脇に寄り、左の腕でひょい、と抱える。そのまま岩へ向かう二人のあとに、グンニたちが後ろからついて行った。

『壁』である。遠目にも巨大な岩だが、目の当た

9 第四回 草原の術師

りにすると、他の表現などしようがない。

大きな岩壁の中、少年背の三倍くらいの高さに、印とそっくりの竜の文様もんよう。その下に、妙な文字が四つばかり列ならんでいる。

「読めるか？漢族の文字でもないようだが」

「これ、ぼくたちの文字だよ。ええと…」

『叩けば…聞く』かな？』

「叩く、か？よしよし」

グンニは拳こぶしに皮の切れ端を巻き付けて、岩に叩きつけた。しかし、岩はびくともしない。

「フサン、キツチ、モツテコイー！」

無口な男が、馬の脇から大きな木鎚きづちを引きずり出した。そのはずみで、馬は反対側へよろけてしまう。長は雷遊子をチャムリに預け、木鎚を両手で受け取った。その重みを確かめるように、二、三回ほど軽く振ってから、右の肩こしに大きく振り上げる。そのまま、体ごと大きな鎚となって、岩に跳んで行った。

ずうん

地に響く重い音に混じって、細かく砕けた岩の落ちる、ばらばらという音がかすかに聞こえる。…だが、それだけだった。

「だめか…」

重苦しい空気が、あたりに流れた。チャムリなどは泣きそうな顔をしていた。

そんな中、小さな影ががちよこちよことグンニのそばに寄ってきて、言った。

「みんなでここから離れて。ぼくが、やってみる」

七

岩壁の前に少年が一人。上に羽織っていた青緑色の上着を脱ぎ捨て、手を目の前で妙な形に組んで、じっと目を閉じている。

折からの風に、先ほど砕けた岩のかけらが砂塵となって舞い上がり、雷遊子のからだに当た…らなかつ

た。その手前で、左右へ分かれて行ったのである。何かに阻まれたかのように。

『殻』結果という。自分の回りに、見えない殻を作り出す術である。もちろん、普通の人間にできるものではない。少年は、衝派の術師であった。

仙人ではない。宗教とは一切関わりがない。命そのものである『光』を用い、様々な術を身につけてはいる。が、その本来は、ただ『空魔』の気から、己の身を守るためにだけに生まれた自衛の集団。それが衝派である。

前に組んでいた両の手を、すっと上に振り上げる。と同時に、なにやら白っぽい霧のようなものが、その頭上にぼんやりと現れる。先ほど作った『殻』の結果が、一つにかたまるうとしているのだ。

空を仰ぎ、白い塊が大きくなるのを何度か確かめ、十分に大きくなったと見てとると、雷遊子はそれを

まるで掴むかのようにして、そのまま岩壁へ向けて走り出した。

「せえ、のッ！」

掛け声と共に飛び上がり、手を前へ投げ出す。白い塊はそれに従って前に飛んで行った。

飛ぶに従い、球状の塊の先端が細くなり、巨大な爪のように変化して行く。雷遊子がいま使える、最強の大技『白竜爪』である。

大地が揺れた。

白竜の爪は、大岩の中腹に突き刺さり、奥へとめりこんでいく。雷遊子はあわてて術を解いた。

「ごご、ご」という重い音が、なお終わりなく続いている。

「うあ……」

心の中で冷や汗をかきながら、雷遊子はただ茫然と、目の前の大崩壊を見つめるしかなかった。

崩れ落ちる岩。舞い上がる砂ぼこり……

11 第四回 草原の術師

ようやく落ち着くまでに、一刻ほどかかっただろうか。崩れ落ちた岩の間から、黒い影があらわれた。「こらア、どこのバカだ！」

俺ア『叩け』つつたんだぞ、崩すたアどういうつもりだィー！」

びつくりした雷遊子、自分でも気付かぬうちに、手が型を組む。『光』が回る。みるみるうちに少年を包み込む『殻』の境界。

岩の中から出てきた男は、その手の型を見て仰天した。

「おめえツ、妙…妙漣みよつりん、か？」

少年は手をほどいて、男の方へ走りよる。

「老師の知り合いなの？」

それを聞いた男、表情がふとやわらかくなる。

「老師…ソツか、妙漣の弟子…あいつ、また弟子をとれるようになったのか」

大きく息を吐いて、男はその場にしゃがみ込んだ。

「あの、おじさんは一体…」

覗きこむように立つ子供の顔に苦笑しながら、「『おじさん』ってな、止めてくれ。俺アがくしやう岳生。おめえと同じ、源流の術師だ」

少年は源流の礼をとった。岳生は軽く返礼して、椅子代りになりそうな岩を探す。

「ぼくは雷遊子っていいいます」

腰をおろしかけた岳生が、その言葉に跳ね起きた。

「まさか…！」岳生の目が丸くなる。

「おめえ、いま何歳だ？」

「よく知らないけど、拾われてからは八年…」

岳生がいきなり雷遊子の頭に手を伸ばし、髪の毛をぐしゃぐしゃにした。

「ンなことくだ言ってんじゃねエよ。八歳って言やアいいんだ、八歳って！」

…そうか、あれから八年経つのかイ。俺も老けるはずだアな」

雷遊子のきよんとした表情に、岳生は思わず吹き出した。

「あはは、覚えちゃいねエよなア。お前を拾い上げた空諾——つと、今は緑宝寺だっけな。あいつがみんなに見せて回ったんだよ。『この子が衝派を救ってくれる』って言ってな。もちろん俺も見た。」

「そんなー！」

「期待されてんだ。悪いこつちゃねエよ。」

「そもそもおめえ、あんな術の使い方じゃ、まだ術師じゃねえんだろ？なのに一人で緑宝寺の外に出てるってこたア、一人でも十分修業できる、って認められてんだぜ」

「えっと、その…」雷遊子は手をばたばたと振って、口ごもった。

「なんだ？」

「本当は、老師と一緒だったんです。この…」と、印を懐から取り出して、手の平に乗せ、

「この盤印の使い方を見せてもらいに、『北岩の術師』のところに行くところだったんです。でも、途中で老師はその…湯磨…なんとか、って人に…」

どん、という硬い音。岳生が、拳を地面に叩きつけたのだ。

「湯磨鰓螺！生きてやがったんか！！」

……そっか、そんじゃしかたねエな。妙漣とあの野郎の間にや、深工因縁があるらしいし…

「それで、おめえは一人でその——北岩の術師、だっけ？そいつに会いに行くわけだ」

雷遊子はくりとうなずいて、

「ここは北の方だし、大岩があるし、盤印と同じもようがある、っていうから…」

「悪イが、俺アそんなたいそつな術師じゃねエぞ。」

…しかし…ふん。北岩、かあ…多分、あん人だろうなあ

少年の目が輝いた。

「知ってるの？」

岳生、おや、と相手の目を見て、

「おいおい、北岩つつたら、雷天人のお前エにや縁の深い場所だろ？知らねエわきゃねエだろうが。」

13 第四回 草原の術師

「そもそも雷天…」

と、そのまま言いかけてから気がついた。目の前
のあからさまにいぶかしげな顔。

「…ッと、ちょっとまでよ。ひよっとしてお前エ、妙
漣からなんも聞いてねエのか？」

「うん。なんか、みんなして隠してるみたい。

…雷天人って、なんなの？」

岳生は頭を右手で押さえ、しばらく考え込んでい
たが、不意に顔を上げて言った。

「わあつた、ンなら俺も言わねエ」そのまま腕を組
み、目をつむる。

「ええ!？」

目を開いた岳生。老師の目に似てる…ふと、雷遊
子は思った。

「あいつあたしかに、ちツと考えが歪ゆがんでツけどな。
わけもねえのもったいつけるよつな奴じゃあねエ。
きつとなんか、あるんだろ」

言いながら、雷遊子の頭をぼんぼんと叩く。少年

は、まだ納得いかないといった表情で、それでもこ
くりと頷いた。

「しっかし、なんでこんなところ来ちまったんだ？北
岩とここじゃア、まるつきり方向が違つぜエ？」

「これが、教えてくれたんです」言いながら盤印を
差し出す。

「見してみ。

…なるほど、確かに、ここを目指すようにしてあ
る…妙漣か、空諾か…誰がやったか知らねえが、お
前エを俺ンとこに來させたかつたらしいな。

…おや、なんだ？この『光』、これだけやけに目立
つように…」

岳生の考えは、遠くからの声に妨さまたげげられた。雷、
と呼ぶ声。グンニたちだった。

手を振る雷遊子を見つけて、チャムリが駆けてく
る。グンニとフサンは、岳生を見つけると、その場
に留まった。

チャムリは、岳生を見つけるなり、その首にしがみついた。

「岳おにいちゃん、会いたかった!」

目を白黒させていた岳生、とりあえず、首から手を振りほどいて、その顔をじつと見る。

「お前…ソツか、あの時の小娘か。大きくなつたもんだなあ」

雷遊子、何が何やらわからないでいる。

「な…ええと…どうなつてるの?」

「ああ、こいつか。」

ずっと昔な、こいつらが襲われてたのを救けたことがあつたんだよ。俺ア救つた何だつてなア好きじゃねエんだが、相手が郭羅派かくらの術師じゆしだつたんでな、黙つてるわけにやいかなかったんさ」

「で、チャムリさんを…?」

「そつ、この小娘が囚とらわれちまつたんで、色々こちゃこちゃとあつてなア」

「こちゃこちゃ、はないんじゃない?」

チャムリが頬ほを膨はらませて抗議する。

「岳おにいちゃんが悪いんじゃない。だいたいあのとき…」

頭を抱えた岳生、手を振つて制する。

「わあつたからよしてくれ、その呼び方。カユくなつてくつから。俺ア岳生だ、『岳生』!」

娘の目がいたずらっぽく光る。助けてくれたときと同じ人とは、とても思えない。雷遊子は信じられない思いでその目を見つめていた。なんか、子供みたいだ……

「そつ呼んだら、約束思い出してくれる?」

「約束ウ?」

「そつ、七年前の約束。思い出さないんだつたら、岳おにいちゃんのまんまよ」

きやらきやらと笑いながら、チャムリは雷遊子をつれて馬の方に向かった。

一人残された岳生、眉間まげんに縦皺を作つて一言つぶ

やいた。

「年頃の娘って奴ア…わからねエ」

八

「でも、なんで岩の中にいたの？」

岩を崩されて、やむなく天幕へと向かう馬の上、岳生の前に座った雷遊子が、いかにも不思議そうな顔で尋ねる。岳生は苦笑した。

「俺ア、強すぎたんさ」

少年は後ろを振り向いた。いぶかしげな表情で、

「え…？強い方がいいんじゃないの？」

やれやれといった表情を作りながら、岳生は、上半身をぐいとねじった少年を前に向かせた。自分は馬の手綱たづなを緩めて、のんびり歩かせながら話しはじめる。

「むかしな——相当むかしだ。俺アお前エの師匠の妙漣と、あと泉確せんたいってやつと一緒になって、正義ツ

ラして暴れ回ったもんさ。

『鉄身てつしん』の妙漣が境界。『神足しんそく』の泉確が浮動呪。んで俺はもつぱら攻めよ。『衝派せんぱいの三頭竜さんずりゅう』の前に、敵なんざいなかった…」

いつのまにか、チャムリの馬がそばに来て、並んで話を聞いている。手には水筒と、小さな椀が三つ。どうやら、グンニたちは先に行ってしまったようだ。

「つつても、俺たちだつてただの術師だ。どうにもなんねえこたアある。

そんなとき、攻めに徹してるとな、どうしても守りがうざツたくなんだ。だから俺ア、最強の術を作ったかつたんさ。空魔でもなんでも、一発でぶつとばせるヤツをな」

チャムリが茶をいれてくれた。このあたりでは、茶は高級品である。岳生は小さい椀から少しだけ飲み、股の間に置いた。

「妙も泉も止めたさ。そんなもん作っちゃいけねエ」

つってよ。だけど、そんなときの俺にや、んな言葉ア、耳に入らなかつた…で、その術はできちまつたつてわけだ」

雷遊子が、また不思議そうな顔で振り向いた。

「それって、まえに空魔が現れる前だよな。…どうして倒せなかつたの？」

その目をじつと見つめる岳生。目の光はやさしそつでもあり、寂しそつでもある。ちよつとだけためらい、やがて息を鋭く一つ吐くと、口を開いた。

「ありやあ、生き物にしか効かねんだよ。」

空魔退治に加わりやしたものの、持つてる術はみんな通じねえ。しまいにや、全滅の報を届ける連絡役だ。あんな戦いで、唯一の生き残りだぜ。恥が服着て歩いてるようなもんさ！」

苦い顔で、冷めた茶をあおる。

「空魔にや使えねえ術だけど、人に使やアこれ以上のモンはねえ。いらねえ術は封じんのが習わしだけだよ、俺のは強すぎて、誰も封じられなかつた。しゃあ

ねエから、俺ごと封じることにしたんさ」

「い、岩の…中に？」

大きくうなずく岳生。となりのチャムリが、なぜか浮かぬ顔。

「あれだけの大岩なら、ちつとばかりの術じゃ崩れねえからな……」

ただ、こんな術でもいつの日か、要ることもあるかも知れねえとは思つた。だから、おもてに書いておいたんさ。『用があるなら叩け』ってな」

それから先は、だれも口を開こうとしなかつた。

九

それに最初に気付いたのは、岳生でも雷遊子でもなく、チャムリだった。

「ねえ、あれ、なにか変よ」

いま離れたばかりの、大岩のあたり。崩れた石が、なぜか宙に舞っている。複数の術師が『風』から出

17 第四回 草原の術師

てくるとき、必ず起こる現象。

「あんなに大勢、『風』で来るだってエ!!」

「こんなところに、術師が来る用などない。ましてこれほどに正確に、『風』だけ使ってやってくるなど、狙われているとしか考えられない。」

「そうか、あの『光』!!」

雷遊子を持つ印から発していた、妙に目立つ『光』、こいつら、あれを直指してきやがったんだ…!

「雷、ヤツらの狙いは、お前エの持つてる印だ。それ持つて、どつか引つ込んでろ!」

引つ込んでろ、と言われても、あたり一面、身の隠しようのない草原。岳生、思い余つて雷遊子を上空高くはね飛ばす。大岩の残骸あたりへ、うまく落ちたのを見てとり、そのまま風の巻く場所へと、馬を走らせた。

それが、いけなかった。

「きゃ…!」チャムリの悲鳴に振り向いたが、そこ

には馬の影すらない。かわりに前の方から、しわがれた声が聞こえてきた。

「岳生かア、ひつさしぶりだなア」

聞き覚えのある声に、勢いよく声の方を向く。勢い余つて姿勢を崩し、馬から落ちてしまった。馬はそのまま、あらぬ方向へ駆けて行く。もう逃げられない。

「さあ、緑宝寺の盤印とやら、渡してもらおうか」

いや、逃げるわけにはいかなかった。

「さもないと、この女がどうなるか…」

相手の右腕は、後ろ手にしたチャムリの両腕を、がっしりと押えつけている。いつの間にならされたのか、口には布を噛ませられ、ただ睨み付けることしかできないチャムリ。

その後ろには、四人の術師が固まっている。スキがつかない。

岳生の頭の中を、七年前の出来事がよぎった。七

年も身を封じること、いろいろな記憶が薄れてゆく中、どうしても頭の中から離れなかったあの出来事が――

十

郭羅の連中の目的は、もともとは単に馬が欲しいだけだった。

草原に住む者にとって、馬は命と同じくらいの価値がある。グンニをはじめ、男たちはみんな総出で、奴等やつらに対抗した。だが、相手は術師——それも、容赦を知らねえ術師だ。普通の人間に、太刀打ちできるはずなんざなかった。

俺が彼らに会ったのは、ちょうどその時だ。術師でもない相手に、術を振るつような奴はいくらなんでも許せねえ。かつて三頭竜として暴れまわったころの血が、騒いだ。

術を使って、俺はあっさりと奴等を追い返した。あ

まりにもあつけないその戦いの中で、俺は取り返しのつかない過ちを犯した……名を名乗ってしまったのだ。

『三頭竜』の岳生。無敵の術を持つ男——その名を聞いて、強欲な奴等がどう思うか、そこまで考えがまわらなかった俺は、やはりのぼせていたんだろつ。

そして、チャムリが捕まった。今度の奴等は、俺を狙って来たんだ。最強の術を教えると迫られた俺は、身体に教えこませてやった――

あの恐怖の術を食らって、無惨に倒れる男を目のあたりにしたチャムリ。助け起こす腕を振りほどく小さな手。そしてあの怯えた瞳こぼれ。

こんな術は使えねえ。誰も、二度と使っちゃならねえ!! そう自分に言い聞かせて、俺は岩の中に飛び込んだ。あの術は、偶然にできちまったもんだから、俺がいなくなれば使える奴は出てこねえだろう。

岩の外に彫った文字は、墓標のつもりだった。叩

19 第四回 草原の術師

いたくらいで壊れるような岩じゃねえし、叩かれたからって出るつもりもねえ。ただ、最後まで術師でいたかっただけのことだ。

岩に籠ること自体は、苦でもなんでもなかった。だが俺は、あの子とひとつ約束をしていた。粗暴だのなんだのと言われちゃいるが、約束を破ったことは一度だってない。その俺にとって、この約束破りは辛かった――

さてよ?……約束!?

『岳おにいちゃん。あたし、おにいちゃんのおヨメさんになつたげる』

差し出された小さな手。七年前の、小さなチャムリ。空鷹を倒す手助けすらできなかつた自分を責めて、緑宝寺を出て以来、忘れていた笑顔を取り戻してくれたチャムリ。

『ははは……お前が十八過ぎたら、こつちからお願

するかもな……』

『ほんとうね?ほんとうよ!約束だからね――』

十一

「思い……出した!」

目の前に、まるで昨日のことのように浮び上がる、あの声。あの姿。

「俺のことなんざ、二年もすりゃ誰ひとり覚えちゃいめエ……それが俺の罰だと思つてた。それなのに……たははッ、七年も……十八になるまで、あの娘ア待つてたつてエのか!」

苦笑しながら、前を見据える。

「んなことも知らねエで、俺ア岩ン中で昼寝してたつてエのか!」

もはや、彼の眼中に敵の術師たちの姿はなかつた。自分と、チャムリと、そして彼女を掴まえている男。それしかない。

「どうだろうが、死なせるわけにヤアいかねエ……」
黒い瞳が、鈍く光った。

「いやあああ——」

そのとき、かけ声と共に、大岩の上から何か飛び降りて来た。それに気付いた術師たちが振り返る。それは少年——雷遊子だった。

術師同士の戦いで、空に飛ぶのは下策中の下策である。術師たちは『ばか』とでも言いたげな顔で、各々術をふるう。まさに狙い撃ち、はずすわけはない。のだが、当たらない。雷遊子の足元には『殻』の結果が張られている。岩をも砕く『白竜爪』、その源たる結果ごと落ちていたのだ。

術師たちが、あわてはじめた。各々、己の術に自信はある。それをまとめて食らってもびくともしないあの結果。あんなものが頭から降って来たらどうなるか——

チャムリを掴まえていた男も、ふとそちらに気をと

られる。その瞬間を岳生が見逃すはずなどなかった。「チャムリ！俺のヨメになりたきゃ、走れ！」

娘のびつくりした顔が笑顔に変わるまでに、ひと呼吸いらなかった。チャムリはつかまれた腕にかまわず、だつ、と駆け出した。手を振りほどかれた男が素早く駆け寄る。だが、ほんの一瞬だけ、二人が離れた。

岳生には、それで十分だった。

「地獄で反省しやがれ——『莫生』!!」

かけ声一閃。その途端、男の体から肉が崩れ落ちて行った。追いかけてよと動いた腿から肉が溶け落ち、骨が解け落ちる。たまらず地につこつとする手が肘から抜け落ち、地面に着く前にその形を失っていった。痛みがするのかわ、叫ぶ声が喉を震わせる。首の肉がその震動にしたがつてほろと吹き飛び、あらわになった骨がかさかさとして崩れ落ちて行く。支えを失った頭がころりと落ち、胴と同時に粉となった。

21 第四回 草原の術師

莫生破。『破』の一字は飾りにすぎず『莫生』とい
うのが本来の名前。すなわち「生きるな」である。

岳生があみだし、いまだ岳生しか使えない術。相
手が生身である限り、決して耐えることの出来ない
最強の秘術。

避ける手段はただ一つ。結界である。だが、なま
じの結界では避けられない。四人が全力で張らない
限り、まず破られるだろう……しかしそんなものを
張ってしまったが最後、そうやすやすとは動けない。
上からは迫り来る巖のごとき結界。横からは必殺の
莫生破。

『やられる』と悟った四人。それでも必死に結界を
張り、その一瞬を待つ。と、その中央で風が巻いた。
風を中心になにやら黒い影が現れる。その影は四人
を風に包み、かき消すかのように姿を消した。まさ
に、一瞬のできごとだった。

雷遊子は困っていた。このまま落ちたらただでは
すまない。が、どうすればゆっくり降りられるかもわ
からない……そんなことは習っていないのだ。考え
込んで落ちるだけ。地面がだんだん近くなる。そ
こではつと思いついた。なんだ、足の下に敷いてる
の、結界じゃないか――

雷は結界を解いた。そして今度は、真下の地面を
覆うような結界を張る。半球状に張られた結界を転
げ落ちるように地面に倒れた。

駆け寄ってきた岳生の首には、チャムリがぶら下
がっていた。少年はすぐさま跳ね起きて、口の布を
ほどいてやる。

「ありがとう！」最初に、チャムリが言った。

「ずっと言いたかったの。」

たすけてくれたのに、いやな顔しちゃって。その
まま岩の中に隠れちゃったでしょ。どうしても言い
たくて、ずっと、そればかり考えてきたの。

「——ありがとう、岳おにいちゃん!!」

岳生は頭を掻きながら、チャムリに背を向けた。そしてただ一言。

「思い出したんだから……」岳生『って呼んでくれや」

二人を見ながら、雷遊子はちょっと居心地が悪そうに、それでもにっこりと笑って、ひとり天幕の方へ歩きはじめた。

十二

「おめえよ、あれじゃやばいぜ」

え、と振り向く雷遊子。チャムリに救けられた、あの天幕の中。わずかながら分けてもらった水と食料を袋に詰め込み、ここを去るつとする少年に、岳生が言った。

「さっきの戦い方だ。あんなんじやア、そのうち死ぬぜ」

「あれの……どこが？」

「わかんねエか。わかんねエよな。昔の俺も、やっぱりわかんなかった。だから、最後は若ん中に身隠すハメになっちまったんだ」と苦笑して

「おめえにまで、俺の二の舞はさせたかねエんだよ」

「でも、どこが……？」

「こればかりや、口で言ってもわかるこつちゃねエよな。……つつつても、俺ア『教える』ってエな苦手だし……」

そうだ、俺の知合いに、武術の得意なじいさんがいる。一筆書いてやツから、そこ行ってみな」

懐から、古びた竹筒を取り出して、さらさらとしたためると、雷遊子に押し付ける。

「じゃ……ちよいと印かしてくれ」

何やら盤印の上で手を結ぶ。と、雷遊子には、確かに光の様子が変わったように見えた

「ほら、ここに来たときと同じ要領で、こいつに従って行きやアつく。おまけにあの妙な光も消しといた

から、さつきみてえに、いきなり襲いかかられることとねエぞ」

雷遊子は盤印を握ったり、撫でたり、確かめるようにいじり回してから、懐ふところの奥にしまい込んだ。

「岳生さんは、緑宝寺には帰らないの？」

岳生は草の布団に腰をおろし、その感触を試すかのように幾度か押していた。

「俺アしばらく、こいつらと一緒に居るよ。緑宝寺に会ったら、そう言つといてくれや。

術師じゃない生き方も……ま、悪くないかも知れねエしな」

片付け終わった荷物を背にかけて、天幕の入り口に向かいながら、雷は首をちよつと後ろに向けた。いたずらっぽい目が、そこに光っている。

「チャムリさんよろしくね」

天幕の扉を開けながら、からかい気味に言う雷遊子に、岳生がひとこと返した。

「さつさと行ッちまえ、このマセガキ！」

岩しか見えぬ山の中、何も無い空の間はざまから、一つの影が落ちてきた。

影はすぐさま人の形をとる。はつとしたように顔を上げると、抱えていた杖の上端、蓋ふたのようなものを取り去り、左手で中程をつかんで大きく空を裂いた。とたんに、あたりが霧のようなもので覆われる。

彼の背は、なにかに押し当てたように平たく変形し、見る間に濡れていく。それと同時に、墜おちち方がすつ、と緩ゆるくなった。

やがて、その体が大地に触れた。彼は飛びおきると、顔やら身体やら、手当たり次第にさすりはじめる。全身はびつしよりと濡れていた。

「あつツ……くうツツ！」

——いつもながらとは言え、空の中の水つていうのは、どうしてこう痛いんだらうな！」

ぶつくさと文句を繰り返す彼の耳に、風を切るよ

うな音が響く。振り返った瞬間、避ける間もなく子供がのしかかって来て、二人はそのままひっくり返ってしまった。

「大丈夫かい、風くん。……おい、風遊子！」

ゆさゆさと揺すぶられるうち、ようやく小さな眼が開きはじめた。

「あ…鮑采さん」

ほっと息を吐き、少年の体をあちこちさす。大きな怪我は見あたらない。

風遊子はしばらくぼうっとしていたが、突然はね起きて、腰の袋を探った。取り出した玉には、傷一つない。そのまま玉を抱き締めるようにして中に見入った。

「あ、もとに戻ってる！」

どれどれ、とのぞき込む鮑采。ひそかに安堵のため息をもらし、

「うむ。どうやら乗り切ったようだな。それに…」

玉のすみにかすかに映る黄色の光点を指さし、

「これが緑宝寺だとすると、一気に五百里ほど来たことになる。雷くんまでは、あと三百里ちょっとか。これなら追い付けるな」

「そうだね。じゃ、すぐ…」

指を十字に組み、空を見つめる。『風』に乗るときの基本の構え。

「ちょっと待った。風遊子、雷くんの方に、風が流れているのかい？」

風は、しかたない、と言った雰囲気構えを解き、目をつむって『風』を見る。

「ええと…ああ、だめ。近くのはやっぱり逆方向だ」「だつたら歩こう。三層より上の『風』は、当分の間、使用禁止だ」

その言葉に、ちょっと頬を膨らませかけた少年は、あきらめて下を向いた。

「はあい」

しょんぼりとする少年の肩に、手が置かれる。

「間違えてはいかんよ、風くん。他人を救けたければ、まず自分が生きることだ。いかな苦境に立たされようと、どれほどの恥をさらそうと、まず生きて、相手の前までたどり着くことだ。」

…それだけの覚悟がないなら、助けに行く、などと軽々しく口にしちゃいかん」

口調こそやわらかいが厳しい言葉に、恐る恐る顔を見上げる。男の顔は、静かな表情を浮かべていた。怒るでなく、たしなめるでなく。ただ静かに、顔で風遊子に問いかけていた。『わかるか?』と。

「はい!」

ぶん、とつなずき、また明るい表情に戻った少年を見て、鮑采はにつ、と笑って言った。

「じゃあ、まず飯にしようか——」

むかしのはなしである。